

小学校 体育

体育科の目標は、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することである。

指導に当たっては、児童の発達段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行い、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努め、特に、学校における食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、体育科の時間はもとより、家庭科及び特別活動等においても、それぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることが大切である。また、家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮することが必要である。

1 体育科の指導の重点

児童に心と体を一体として捉えさせるために、運動が心と体にさまざまな効果をもたらすこと、心の健康が運動と密接に関係していること等を、具体的な活動を通して理解させる。また、児童の発達の特性に合った運動の実践を通して、基礎的な身体能力を身に付け、運動の楽しさや喜びを味わわせ、生涯にわたり学習する基盤が培われるようにする。さらに、運動領域と保健領域を一層関連付けて取り上げ、児童の健康・安全についての理解をより深め、学習したことを家庭で生かすなど、進んで健康の保持増進と体力の向上を図ろうとする実践力を育てる。

(1) 体づくり運動系を充実させよう

ア 体ほぐしの運動（遊び）では、運動（遊び）を通して自己や仲間の心と体に向き合い、心と体に関係し合っていることに気付くとともに、仲間と関わる楽しさを体験し、仲間のよさを認め合うことができるように指導する。また、保健分野「心の健康」に関連して、心と体が深く関わっていることを体験できるよう留意する。

イ 低学年では多様な動きをつくる運動遊び、中学年では多様な動きをつくる運動を行うことで、体の基本的な動きを培う。高学年での体の動きを高める運動については、体の柔らかさ及び巧みな動きを高めることに重点を置いて取り組む。また、体づくり運動以外の領域においても、学習した結果として、より一層の体力の向上を図ることができるようにする。

(2) 発達段階に応じて各運動領域における指導内容の充実を図ろう

ア 低学年では各運動領域を「〇〇遊び」と示し、伸び伸びと体を動かす楽しさや心地よさを味わうことをねらいとした学習を行い、幼児教育との円滑な接続を図るようにする。

イ 陸上運動系では「走・跳の運動（遊び）」及び「陸上運動」に加え、児童の実態に応じて「投の運動（遊び）」を指導に加えることができる。

ウ 水泳運動系では中学年の浮いて進む運動において、高学年の水泳につながるように、クロール等の近代泳法にとらわれず、初歩的な泳ぎを身に付けたり、補助具を使って泳いだりする経験ができるようにする。

エ ボール運動系では中学年の「ゴール型ゲーム」において、味方チームと相手チームが入り交じって得点を取り合うゲーム及び陣地を取り合うゲームを取り扱うものとする。高学年の「ゴール型」はバスケットボール及びサッカーを、「ネット型」はソフトバレーボールを、「ベースボール型」はソフトボールを主として取り扱うものとするが、これらに替えてハンドボール、タグラグビー、フラッグフットボール等を指導することができる。

オ 表現運動系では低学年・中学年においてフォークダンスを指導することができる。高学年においては、リズムダンスを加えて指導することができる。

カ オリンピック・パラリンピックに関する指導については、フェアプレイを大切にするなど、児童の発達段階に応じて、運動を通してスポーツの意義や価値等に触れることができるようにする。

キ 集団行動については、各学年の各領域（保健を除く）において適切に行う。

(3) 心と体の健康を重視した保健領域の学習指導をしよう

ア 児童の心身の発達段階を踏まえて、身近な生活における健康・安全について基礎的な内容を理解させ、自ら進んで健康で安全な生活を営む能力と態度を育てる。

イ 健康な生活、体の発育・発達、心の健康、けがの防止や病気の予防について、児童が身近な生活における課題を見付け、グループ活動や実習等を通して解決することにより、健康や安全の大切さに気付くことができるようにする。

ウ 知識を習得する学習活動を重視するとともに、習得した知識を活用することができるよう身近な日常生活の体験や事例等を題材にした話し合いや、けがの手当等の実習、実験、ブレインストーミングを積極的に学習活動へ取り入れる。

エ 健康な生活を送る資質や能力の基礎を培う観点から、中学校の指導内容につながる系統性のある指導ができるように、毎日の生活の仕方と健康及び病気の予防についての指導の充実を図る。

2 主体的・対話的で深い学びを引き出す体育科の学習指導

(1) カリキュラム・マネジメントの視点に基づいた指導計画を立てよう

ア 運動領域と保健領域の指導内容の関連を踏まえ、体育・健康に関する指導につながる健康安全・体育的行事等との関連について、6年間の見通しをもった年間指導計画を作成する。

イ 指導計画の作成に当たっては、単元等、内容や時間のまとまりの中で、学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面、対話によって自分の考え等を広げたり、深めたりする場面、児童が考える場面と教員が教える場面等を効果的に設定し、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。

ウ 障害のある児童への支援や実生活へのつながりを充実する観点から、必要に応じて、地域の人的・物的資源との連携を図り、指導の充実につなげる。

(2) 課題解決に向けた学習を展開しよう

ア 自ら粘り強く取り組み、考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり、新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促す。

イ 児童が他者との対話を通して自己の思考を広げたり、深めたりするなどの対話的な学びを促す。

ウ 主体的・対話的な学びの過程を通して、自己の運動や健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの深い学びを促す。

(3) 次の学習活動につながる評価をしよう

ア 評価規準や評価方法を再整理し、児童の運動の様子から、一人一人の到達度やよい点、進歩の状況等を積極的に評価し、その上で、児童への指導や支援を工夫し、指導と評価の一体化を図る。その際、技能に偏らずバランスのとれた分かりやすい評価項目を示す。

イ 学習活動の中に、児童が学習の過程や結果を振り返るための自己評価や、仲間と関わり合いながら互いの成果を振り返るための相互評価を位置付け、それをもとに学習活動を見直す。

ウ 学習ノートや話し合いの場を活用し、児童の自己評価や相互評価を系統的・効果的に進めるように工夫する。